
君へ曖昧なキスを。

星空ナルミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君へ曖昧なキスを。

【コード】

N0713W

【作者名】

星空ナルミ

【あらすじ】

吸血鬼一族の姫として上に立つ少女、雪刃はある日悠兔という少年と出会う。

雪刃は悠兔とは自分と似た何かを感じ仲良くなるが、後に国が定めた婚約者だと知り驚く。

将来を誓い合った二人だったが、ある日葉城颯真という能力を狙う謎の青年が現れて…

人物紹介

夜空 雪刃

年齢 18

身分 姫君

詳細 強気な性格の18歳。見た目は普通の少女だが実は魅血鬼みけつきという吸血鬼の姫君の生まれ変わり。フィアンセの悠兔ゆうととは恋仲。武器は蒼剣。

2

翡翠 悠兔

年齢 18

身分 王子

詳細 どこか妖しさを漂わせているものの、雪刃に絶対を誓っている。吸血鬼の王子の生まれ変わり。触手や魔術を操り敵を倒す。

葉城 颯真

年齢 不明

身分 不明

詳細 悠兔と雪刃を狙う謎の人物。魔力を吸収して刀で戦う。

02 (前書き)

足元に転がる残骸。

滴り落ちる赤い血たち。

それを舐めて満足そうにする、少女が一人。

「今日はいいものを見せてもらったわ。…でもまだまだ足りない」
「ペろ、と舌を舐めずり少女はその場を後にした。」

「ただいま。」

「姫様！また出かけていたのですか！あれほど外出は禁止している
と…！」

「あーはいはいわかってるって。あたしたち一族は夜しか出歩かな
いって決まりだもんね」

雪刃は使用人の制止を振り切り手をひらひらとさせながら部屋に戻
って行った

この世界ではあたしが次期、王候補だ。本当は候補がたくさんいたけれど皆人間たちによって殺されてしまった。

現に今、この城にはあたしと使用人たちしかいない。

その日の夜。

空を見上げると月はいつにも増して紅くなっていた。

「…また力が増したかな」

ふう、と溜め息をついて手を眺める。

ふと、昔、父親が言っていたことが頭を過ぎる。

月がいつにも増して紅い時は魔力が増す日。

だから力を制御出来なくなってしまうようにしなければならぬと。

「…今日は力が増す日だね、雪刃」

「悠兎…！」

悠兎は、よ、っと窓を開けて部屋の中に入る

「久しぶり、雪刃。会いたかったよ……」

ぎゅ、と抱きしめられて少しだけ視界が暗くなった。

「…あたしもだよ、悠兔」

抱きしめ返すと悠兔の体温が伝わってきて熱が灯ったみたいになる。

悠兔とは元々魅血鬼の姫君として血を求めて飛び回っていた時に出会った。

でもその時点で悠兔は既に国で決められた婚約者フィアンセで、姫であるあたしを知っていたらしい。

「…もっと早く会いたかったな、雪刃おまえと」

そう言って首筋をなぞるように舐めた

03 (前書き)

その日の夜。

空を見上げると月はいつにも増して紅くなっていた。

「…また力が増したかな」

ふう、と溜め息をついて手を眺める。

ふと、昔、父親が言っていたことが頭を過ぎる。

月がいつにも増して紅い時は魔力が増す日。

だから力を制御出来なくなってしまうようにしなければならぬと。

「…今日は力が増す日だね、雪刃」

「悠兎…！」

悠兎は、よ、っと窓を開けて部屋の中に入る

「久しぶり、雪刃。会いたかったよ……」

ぎゅ、と抱きしめられて少しだけ視界が暗くなった。

「…あたしもだよ、悠兔」

抱きしめ返すと悠兔の体温が伝わってきて熱が灯ったみたいになる。

悠兔とは元々魅血鬼の姫君として血を求めて飛び回っていた時に出会った。

でもその時点で悠兔は既に国で決められた婚約者フィアンセで、姫であるあたしを知っていたらしい。

「…もっと早く会いたかったな、雪刃おまえと」

そう言って首筋をなぞるように舐めた

その日の夜。

空を見上げると月はいつにも増して紅くなっていた。

「…また力が増したかな」

ふう、と溜め息をついて手を眺める。

ふと、昔、父親が言っていたことが頭を過ぎる。

月がいつにも増して紅い時は魔力が増す日。

だから力を制御出来なくならないようにしなければならぬと。

「…今日は力が増す日だね、雪刃」

「悠兎…！」

悠兎は、よ、っと窓を開けて部屋の中に入る

「久しぶり、雪刃。会いたかったよ……」

ぎゅ、と抱きしめられて少しだけ視界が暗くなった。

「…あたしもだよ、悠兔」

抱きしめ返すと悠兔の体温が伝わってきて熱が灯ったみたいになる。

悠兔とは元々魅血鬼の姫君として血を求めて飛び回っていた時に出会った。

でもその時点で悠兔は既に国で決められた婚約者フィアンセで、姫であるあたしを知っていたらしい。

「…もっと早く会いたかったな、雪刃おまえと」

そう言って首筋をなぞるように舐めた

「…彼奴は俺や雪刃を狙ってきてる。けれど、彼奴が欲しいのは俺や雪刃自身じゃなくて能力や魔力だ」

「能力、ね…」

あたしや悠兔の能力は普通の一族とは並外れていて、強力だ。最大限以上になると自分では制御出来なくなる。

「！…誰か来る」

バツと振り返ると人影が見えた。

「やあ、姫。…と、その忠犬くん」

「誰が忠犬だ！」

「姫の為によく吠えるねえ…なんとも忠実な」

「…黙れ」

「悠兔！」

雪刃の制止も聞かずに悠兔は颯真に近づき、刃を立てた

「それ以上言つと…どうなるかわかって言ってるのか、お前」

「ごめんごめん降参だよ。…けど、この俺に刃先を向けたこと許さ

ねえ
」

「だめ！」

あたしはとっさに悠鬼を捕まえて抱きついた。

「姫のご登場ともあらばこつしなくてはね」

そう言うと颯真は跪いて、あたしの手の甲にキスを落とす。

颯真はあたしたち一族とは似て非なる存在で、未来永劫な存在であり彼に”死”はない。違うのは強い能力や魔力ちからを源にして生きているってこと。

「俺も忠誠を誓うよ、姫君。君を傷つけない」

「…でもあなたは敵よ。それに悠兎を傷つけるなら許さない」

「おっと、そう怖い顔をしなさんな姫君。…でも能力ちからを手に入れるまでは毎回こつして来るよ」

にこりと笑つと空を見上げた

「ああ、そろそろ行かないとな。…またね姫君と忠犬わんこくん」

風が舞うように彼は消えた。

「…雪刃、俺は何があっても君を守る。颯真からも他の奴等からも」

「うん、ありがとう」

「愛してる、雪刃」

「あたしも愛してるわ、悠鬼」

お互いに口づけを交わすと、目が合って互いに微笑んだ

「…悠鬼、もう行くの?」

「ああ、そろそろ夜明けだ。俺も戻らないと」

「待って!…これ持って行って」

「!…これは…お前の母親の…」

「…形見だけど、悠鬼なら使えると思うの。あたしじゃ能力が足りなくて…」

悠鬼は形見を握ると、わかったと頷いた

「…それじゃあ、またな」

「うん、気をつけて」

彼女…雪刃で使えないものが俺に使えるのだろうか。そんな疑問が頭を巡った。雪刃の能力は全てを使えるようにしてしまえること…

だが、それが通じなくなると言うのは稀なのだ。現に俺の能力も似た形状で出来ているが雪刃には及ばない。雪刃はこの国唯一の王位継承者であり、国を統べる姫。国の一番に立つ者だ。そんな彼女に俺が出会ったのは丁度一年前で、その時点で彼女との婚姻関係が定められていたのだった。

「一年前」

「はあ…はあ…っ」

「お前、血が足りないのか？」

「関係ないでしょ…向こう行ってよ」

「いや、行かない。」

「なんでよ！あたしをバカにしてるの!？」

「…別に？あんたが今にも死にそうな顔してるからほっとけないだけ」

よ…っと、彼は地面に降り立つと振り返る

同じ吸血鬼らしく、牙が妖しく光ったのが見えた

「…あなた、吸血鬼？」

「ああ。一応な」

「…一応って…」

「そっぴゃお前、雪刃姫だろ？」

「っ…なんで「知ってるのかって？それは俺がお前にとっての大事な人だからだ」

「大事な…人？」

「そつだ。…紹介が遅れた。雪刃、改めてはじめまして。俺は翡翠
悠兎…お前の婚約者だ」
ファイアンセ

「ファイアンセ
婚約者…!？」

「しかも国が定めた直々の、な」

「…そう…なんだ…父さんがまた勝手に決めたのね…!」

そう呟いて怒った雪刃が子供に見えてかわいかったのを覚えている。

雪刃は初めて会った時から強い能力の持ち主で、国一と言われるくらいに強くなっていた。国で勝てる相手は居ないと言われた雪刃の母親も父親も今では居ない……。

「…雪刃」

「ん？」

俺はくすつと笑うと雪刃に手を差し伸べた。彼女はきよとんとしたまま俺を見つめていたが、おずおずと手を出して握った。

「よろしくな」

「うん」

吸血鬼は年を取らない。それは俺も雪刃も同じだ。けれど見ている世界が違う。雪刃はこの国を見ているけれど、俺は彼女を支える存在でしかない。それが無性に悲しみとなって苦しめる。

いつか彼女が遠い人になってしまいそうな、そんな気にもなったりする。

「……………誰だ」

振り返ると、居なくなっただけの颯真が立っていた。

「やあ、悠兔」

「忠犬は止めたみたいだな、颯真」

「あはは、君が嫌だと言ったからね。…本気の目をしていたし」

「……」

「…本当に君は彼女に忠実だね。不思議なくらいに」

悠兔は返答する言葉を発するよりも早く手を出したが颯真はひらりと交わすすとんと、と地面に降りた。

「あいつは…雪刃は俺の大事な人だ。お前が雪刃を能力を欲しがるなら」

「俺はお前を倒す」

「はははっ、倒す?…君は面白いことを言うねえ…」

颯真は一瞬ニヤリと笑ったあと、まあいいとまた普段の表情へ戻した。

「…颯真」

「んー？」

「決着をつけよう」

手のひらに炎を灯すと颯真のいる場所へ真っ直ぐ向けた

「そう来るなら…俺も覚悟をしないとね」

ジャキ…っと刀を鞘から抜くと悠兔のほうへ向けた

「「勝負だ」」

- 魅血鬼 鬼城 -

「姫様、そんな顔をして如何致しました？」

「…退屈なだけよ」

「その割には”面白い”という表情ですが？」

「貴方にはそう見える？」

「ええ、とても」

雪刃は、にっと笑うと立ち上がりマントを羽織った

「どちらへ？」

「少し、”面白いモノ”を見物にね。留守は任せるわ。何かあったら伝書蝙蝠「ユウモリ」で知らせてちょうだい」

「承知致しました。姫様にご武運を」

「ありがとう、行ってくる」

雪刃は給仕にそう告げるとあっという間に飛び去った

カキイン…カキイン…っと金属がぶつかると音が響く

「くっ…（強いな…このままじゃ…）」

「どうした？その程度か、お前の能力とやらは」

「ぐ…まだまだ…」

「…そこまでよ」

「その声は…姫？」

「雪刃…！！」

「颯真、それ以上は違反になるわよ」

「おや、そうだったかな？」

「引いて」

雪刃は颯真をキツと睨みつけて従わせた

「姫…な…にを…っ」

「勝手ながら”貴方の身体を従わせさせてもらった”わ」

「そう…か…しかし」

「…!!」

次の瞬間、颯真は呪文を唱え抜け出した

「解除」

「…抜け出した!？」

「すぐは捕まれないからねーそれじゃ」

「待て!!」

「いいのよ、悠兔」

「けど、雪刃!!」

「いいから。… 私たちも帰りましょ」

悠兔はしばらく黙ったあと、舌打ちすると雪刃の後を追った

「魅血鬼 鬼城」

「……」

雪刃は立ち上がり、外を見上げる

この世界は夜が明けない。空はずっと夜のままだ。魅血鬼の一族に“死”がないようにこの世界も終わりがない。…いや、あって、ないようなものかもしれない

中には死のうとした者もいたがそれさえ一族は許さなかったと聞く。

「婚姻は強制するのに”死”はいけないなんてね」

「…今となったらそれも所詮、形だけの掟だろ…俺らの一族はほとんど絶滅に近い。生き残りで力があるやつは俺と雪刃だけだ」

そう言って、ぐっ…と拳を握るとそのまま壁に叩きつけた

「…悠兔…」

確かに悠兔の言う通りだ。統べる姫とその王子と二人きりで全てをまとめて上げてこの世界を率いて行くのは難しい。

「雪刃、この世界は…」

終わるのか、と言いかけたところで真剣な目をしているのが見えて俺は言うのを止めた。

「終わらせない。この世界は」

蒼剣を抜くと、そう呟いた彼女の目は真剣で見惚れるほど綺麗だった

それから数時間。俺と雪刃は月がゆっくり溶けてまた再生するのを見つめた

この世界では夜明けはなくてもそれを知らせる月の再生が見れる

何度も溶けては再生する。それを繰り返している様はまるで”死”
という概念がない俺らの一族のようにも見えた。

概念がないことが悲しいことなのか分からない。…けれど争いながらも国を率いて行かなければならぬだろう…

「…雪刃、俺、まだお前に伝えてないことがたくさんあるんだ…でも上手く伝えられなくて不安に押しつぶされそうになる。こんなに大事な姫を俺はちゃんと守れてない。お前の父親にも母親にも任せられた身だつてーのに…ごめんな…(ぎゅっ…)」

「…悠、兎……」

あたしはそつと、髪にふれた。すると急に抱きしめられる力が強くなって悠兎の”離れたくない”って想いが伝わってくる。出会ってからずっと忠誠を誓い、傍で大事に守ってくれた彼はいつの間にか愛しくて離れられない人になっていた。何かあればすぐに来て助けてくれる…そんな存在。無理をしても助けに来ているのか、と一度だけ聞いたことがあるが、悠兎は笑って多少無理しても姫を守るのが王子の役目だと言っていた。

「(ぎゅー…)…もう、そんな弱気でどうすんの!!」

「雪刃…」

「大丈夫!あたしがいる。…だから、この世界の為に、颯真を倒そう」

「…ああ」

雪刃が、ふつと微笑んだ瞬間だった。

突然ゆっくり倒れてきた雪刃を抱き留める。

「…雪、刃…？」

目を閉じたまま動かない彼女の腹部を見て固まった。刺さった銀の刃が血を吸っていたのだ。

「これは…！？」

「はあい、悠兔くんはじめまして」

「…！！」

可憐な少女は手をひらひらと振ったまま近づいてきた

「…噂は颯真から聞いているわ。私の名前は魔^ま蠅^が聖^{せい}奈^な。」元”神子よ”

「神子…！？」

神子は昔魅血鬼の下で仕え、主従関係だった。しかし反乱が起こると神子は次々と魅血鬼を殺し絶滅へ追い込んだと言っ。

「…何故そんなやつが颯真の下に？」

「計画に賛同したからよ？楽しそうだったし。私ね、楽しいことが好きなの」

「！…（なんだ！？今一瞬殺気が…）」

「アナタはなかなか骨がありそうね」

彼女は、にこつと笑うと刀を引き抜いて血をペロリと舐めた

「計画ってなんだ？」

「勝つたら教えてあげる。死んだら…アナタごと”力”を貰うわ」

「 ” 神の賛美歌” (神のうた) 」

聖奈が刀にキスを落とすと同時に物凄い音量の音楽と無数の十字架が降ってきた

上手く避けたあと触手で聖奈を捕らえた

「 … ” 神の雷悠” 」

「 ぐっ… ああ! 」

「 … 俺の勝ちだ。計画を教えて貰おうじゃねえか 」

「 ふふっ… あはははっ… あははは! 」

聖奈は狂ったように笑い出した

「 何が可笑的い 」

「 いえ、なにも? 約束通り計画を教えてあげる。… 颯真の計画は… 」

聖奈が話そうとした瞬間、彼女は消えた

「 !? 」

「彼女にはまだ話してもらっては困るからねえ」

「颯真！？どこだ！？」

そう呼びかけるも声は辺りに響くだけで返っては来なかった

「（それより雪刃だ！）雪刃、しっかりしろ！雪刃！」

声が聞こえる。

必死に呼んでる、悠兔の声

起きなきゃ…でも身体が動かない

悠兔…

「雪刃っ！」

「ゆ…うと…？」

「よかった…っ」

「…あたし…なんで…？」

「お前は…魔蠣聖奈ってやつに刺されたんだ…血を持っていかれたから少しの間安静にしてろ」

「うん…ありがとう」

微笑んでお礼を言うと悠兔も安堵の表情を浮かべた

- 魔城 -

「颯真！…ごめんなさい」

「聖奈、忠犬を殺せなかったのか」

「じめんなさい…でも必ず殺します…」

「…いや、悠兔は私が殺す。お前は下がってろ」

「……はい」

「聖奈ー、失敗したのー？」

「姫弥乃！」

見た目が完全に女の子のこイツは咲桜羽姫弥乃。組織内の乙男で、私と同じくbloodlylipのメンバー。

「聖奈が翡翠悠兔を殺せないなら僕がお姉ちゃんに会うついでに倒してくるよ？」

「……いい、自分で倒すわ。あんたは雪刃を倒せばいい」

「えーなんでさ！僕はお姉ちゃんが好きだから殺さないもん！」

姫弥乃が言う”お姉ちゃん”とは魅血鬼の姫、夜空雪刃のこと。戦う姿に惚れたらしくそれ以来”お姉ちゃん”と呼んでいる。

「わかった。あんたは雪刃を殺さなくていい。秋冬と春夏に頼むわ。二人はどこ？」

「色姉弟なら…あ。」

姫弥乃が言い終わる前に春夏と秋冬は現れた

色春夏と秋冬は姉弟で春夏は剣の達人だ。秋冬も戦うけれど、残念

な部分があるからなあ……

「聖奈、姫弥乃、呼んだ？」

「……ちょうど話してたところ」

「へえ……」

春夏は一瞬黒笑すると秋冬のほうを向いてにやりと笑った

「な…なに！？春姉…」

「なーにも？（笑）…それより秋冬」

「…？」

「…夜空雪刃を倒しに行くわよ。颯真からの一仕事だから」

「そ…そんなの出来ないよ！…殺されたらどうするのさ…それに相手はき…吸血鬼なんだよ！？」

「がくがくと震えながら答える秋冬。 姫弥乃と私は同時に溜め息をついた。 秋冬の被害妄想癖は生まれつきで、姉の春夏さえ直せないくらい酷いものなのだ。 一度始まると終わらない、とは正にこのことだろう。」

「秋冬、男なんだからもつと堂々としなさいよ！」

「だって吸血鬼の姫だよ！？殺されるに決まってるよ！血を吸われて食べられるんだよー（泣）」

「血は吸うかもしれないけど食べやしないわ！だいたいねえ、あんながそんなだからいつまで経っても幹部に昇格出来ないのよ、ばか！（怒）」

「ひいひい…ごめんなさいごめんなさい…」

頭を抱えしゃがんで謝り続ける秋冬とけなし続ける春夏。また始まったよ…と言うであろうその状況を止めるべく私は春夏に話しかけた。

「春夏、その辺にしておいたら？秋冬の被害妄想癖なんていつものことだし」

「そうそう。僕みたいに可愛く生きないと」

「お前は男あんただろーが！（怒）」

「えー」

「えー、じゃなくて！…まあ組織内の乙男オトメンだから男らしくとは言えないけどー……」

「僕は可愛いもの”お姉ちゃん”が好きなだけだもーん」

「本当に、もっ……」

「あ、そろそろ行くわ。秋冬行くわよ」

「えっ、あ…はい」

春夏の後を追いかけて秋冬も慌てて出て行った
それを確認すると聖奈もくるりと背を向ける

「…聖奈、どこ行くの？」

「玲奈のところ。会いに行かないと」

「玲奈ちゃんどこ、ねえ…元気なの彼女」

「…元気だよ、玲奈は」

聖奈はそう言って悲しそうに笑った。

鈴奈は聖奈の妹だ。人間だったころの記憶を持たず、聖奈が姉だったことすら忘れている。アンドロイドとして命を繋いでいる鈴奈は殆ど表に出てくることはなく戦うこともない。稀にあるとしたとしてもそれは颯真の指示で動いて戦うだけだ。

「所詮、”颯真の道具”にしか過ぎない…か」

聖奈はそう呟くと暗い廊下を歩いて鈴奈の元に向かった

-
鬼城
-

「…純血、足りそうか？」

「うん、なんとか」

「そうか」

「……悠鬼」

「んー？」

「…この国も、国民もあたしの財産だ。国民は皆優しくて姫様、姫様、と慕ってくれる。国は父様と母様が二人で築き上げあたしと悠兔に託してくれた。法律ルルや能力ちからを与え、教えてくれたのも母様と父様。でもあたしには何も無い。託された国と国民以外、なにも…継承者なのに…魅血鬼の姫なのに…っ」

いつのまにか雪刃は涙を流していた。母親と父親が居なくなった途端、彼女は国ごと背負わなくてはならなくなった。何が起こっても嫌になつたとしても言う人が居ない。それがどれだけ辛いのか計り知れない。他人ひとを引つ張つて法律ルル通りに従わせると言うのは難しい。その法律が気に食わなければ反乱やデモを起こす者たちだつて出てくるだろう。雪刃はそれさえ覚悟していると以前話していたことがある。もしあたしのやり方が気に入らず反乱を起こす者たちが出てきたとしたらそれはあたしの至らない部分があつたと言う証拠だ、と。

俺は泣いている雪刃を見て居られなくて抱き寄せた

「…!!悠兔…?」

「全部一人で背負うな!…お前には俺がいる。国も…国民も…背負つて更に颯真たち「bloodylip」のやつらと戦うことも決めて…国の魅血鬼の姫として役目も果たして…全部一人でやってる…頼ろうとせず…そんなにやらなくていいんだよ…倒れたらどうすんだよ…」

「う」…めんなさ…い」

「…俺だつて辛えんだよ…そんなお前を見てるのが…」

「悠兔…」

弱々しい声で言った悠兔をあたしは強く抱きしめ返した

「…雪刃…無理すんなよ…」

「うん…わかってる」

今は颯真たちを倒して計画を阻止して国を守らなきゃ。

「…お二人さん、随分とラブラブだね」

「誰…!？」

「僕の名前は咲桜羽姫弥乃。はじめまして、雪刃お姉ちゃん」

「!…なんであたしの名前を…」

「噂は颯真から聞いてるよ。強く勇ましい姫さまがいるってね」

「…雪刃、気をつける。何を隠してるかわからない」

「人聞き悪いなあー何もないって。でも」

ジャラ、と鎖鎌を取り出し刃先を向けた。

「君を殺す道具なら持つてるよ、翡翠悠兎」

「…!？」

「…お前…」

「颯真からの命令なんだ。君を殺して夜空雪刃を連れてこいってね」

「颯真が…あたしを？」

「お姉ちゃん、神子の反乱は知ってるよね？魅血鬼の姫として」

知らないはずがない。同じ魅血鬼たちが一度に消えた抹消事件。唯一の生き残りはあたしの母親に当たる夜空魅姫。その生き残りである魅姫の娘があたしだ。書物も残っているくらいなのだから、よほど酷い事件だったのは間違いないのだろう。

「…知っているけれどそれがどうかしたの？」

あたしは少し間を置いてから冷静に答えた。

「翡翠悠兔が会った、魔蠣聖奈つて子。元神子なんだよ」

「…神子…」

「そう、神子。確か神子は魅血鬼に仕えてたんだよね？でもある時反乱を起こして仕えるのをやめた」

「…だからどうしたって言うの」

「そんな姫さまにいい人をあとで会わせてあげるよ…まずはその狼を倒さなきゃね？」

「ぐっ…!!」

「悠兔!!」

手元に赤い血が広がる。

鎌の刃先は脇腹を貫通してぽたぽたと血が垂れていた。

「お前…忍者か何かか？早過ぎだ」

「あはは忍者じゃないよ？僕は…お姉ちゃんが欲しいだけ」

「さようなら」

姫弥乃がそう言い、ザシュ、と音がすると同時に鎖鎌は勢い良く抜けて悠兔は後ろに倒れた

「悠兔！！」

あたしは駆け寄って抱きしめる

「さ、邪魔者も居なくなっただし。…お姉ちゃん一緒に来て？」

「あたしはあなたと一緒にいかないわ」

「どうして？いい人に会わせてあげるよ？」

「それでも…悠兔を置いて行けない」

蒼剣を抜いて姫弥乃に刃先を向けた。

「怖いねー吸血鬼のお姫さまは。でも」

「僕だって負けないよ？」

ふふ、と妖しく笑った。

「「勝負よ（だね）」」

戦っていて分かるほど姫弥乃は殺伐としたオーラを纏っていた。少し幼さが残る彼は戦うことさえ楽しんでいる。

「ほらほらどーしたの？もっと本気出してよ」

「…っ…く」

このままだと確実に殺られる。そう思った時また声が聞こえた。

「姫弥乃、楽しそうだな」

「颯真！」

「やあ姫君。姫弥乃、初対面はどうだ？」

「僕すごく気に入ったよ？こんなに強いお姫さまならお姉ちゃんになって欲しいな」

「…あたしを連れて行く為にきたの？颯真」

「まあね…でも私が欲しいのは君の能力だから」

くい、と顔を向けさせられ目が合う。颯真の目の中にあたしが映り、それがいやで顔を背けたくなる。

「一緒に来い、夜空雪刃。そうすれば翡翠悠兔を殺さず生かしてやる」

「じゃあ悠兔も連れて行って。そしたら行ってもいいわ」

「それはちょっとなあ…」

「でもあの計画のためならいいんじゃない？ 颯真」

「ふ…そうだな。 姫弥乃、 翡翠悠兔も連れていけ」

「はあーい」

「こうしてあたしと悠兔はそれぞれ颯真たちの元へ連れて行かれることになった。」

- 魔城 -

「（ここが颯真たちの住む場所…）」

ちらつと悠兔のほうを見ると相当ダメージを受けたらしく姫弥乃に引っ張られながら歩いていて息をするのも辛そうだった。

「（あたしが…計画を確かめる…待ってて悠兔）」

「さあ、着いた。…姫君はこっちだ」

「…悠兔をどうするの」

「枷籠^{かこ}にでも閉じ込めておく。姫弥乃、任せた」

「はい お姉ちゃん、また後でね？……会えたら」

「えっ？……ええ」

姫弥乃の言葉に一瞬戸惑った。そんなに生死に関わることなのかしら。いや、でも殺さないと言ったのだからきつと大丈夫だ。悠兔もあたしも。

「こつちだ」

「こ…こは？」

「ああ、君の能力をプログラムさせてもらいたくてね」

「プログラム？」

「そう、プログラム」

ジャキ、と刀を抜く音が背後から聞こえた。

「姫君、この刀、なにで出来てるか知ってるかい？」

「……」

「この刀は吸刀きとうと言ってね。相手の魔力や能力ちからを吸収してそれを自身の中で変換するんだ」

「変換……」

「いや、もう一体いるよ」

颯真は隣接しているカプセルを見つめた。

「耀 - Y 0 . 7 1 5 x x x。彼には翡翠悠兎の能力を受け継がせる」

「…それで計画は終わりなの」

「神子の反乱」を再び起こす」

「…!!」

頭の中が真っ白になった。反乱を起こすと言うことは「国」自体を消すことに繋がる。颯真は優羽と耀のたった2体でこの国を消すことを考えているのだろうか。

「…ひとつ、昔話をしよう。私の一族は魔血鬼で、今までの歴史の中で一族は代々魅血鬼と争ってきた。しかし魔血鬼を継ぐには魅血鬼を殺し、血を祭壇に捧げなくては継げない為そうするしかなかった。私たちにとって魅血鬼は「材料」にしか過ぎない。だけど君は違うよ、雪刃」

「え…?」

どうして、と言う前に壁に追いやられ閉じ込められる。

「雪刃は吸血鬼一族の姫だからね。大事にしないと」

手の甲に躊躇いもなくキスをした颯真。この人は敵じゃなければ本当に忠誠を誓ってしまうんじゃないかと言うくらいあたしに対しては好意的だ。本気で言っているのがあたしを誘い（いざない）たくて言っているのか。やはり颯真の本心は見えない。

「姫だからあたしに好意的なの？颯真」

「姫じゃなくても、雪刃きみだから好意的なんだよ。」

「あたし…だから…？」

「そう、君だから」

「！！」

気づいた時には一瞬過ぎて分からなかった。けれど、身体力が抜けて目の前が歪むことだけはわかった。

雪刃はゆっくりと倒れ、颯真の手に抱きかかえられる。

「雪刃、ごめんね。…でもこれで君の人型クロン純吸血鬼が作れる」

しばらくして目が覚めた。病院のベッドみたいに皺一つない真っ白なシート、窓もない壁、真っ白な天井。起き上がって見えた景色はそんな光景だった。

「！…悠兔！！」

起き上がり悠兔に近付こうとしたら硬い硝子にぶつかった。

「っ…硝子…？」

「ゆ…きは…」

「悠兔！目、覚めたの？」

「ああ…雪刃…ごめん…な…守ってやれなくて…」

「うつん…もついいから…！！」

「！！…雪刃…逃げる…」

「え？…！！」

頬を何かが掠った。手で触れて舐めると自分の血だった。

さつき掠ったのは切れ味のいい刃物と言ったところか。

「ざんねーん殺せると思ったのになー」

「…あなたは？」

「わたくしは私はるかは色春夏。夜空雪刃、颯真様の為に今すぐ消えて戴くわ」

少女は愛剣 虎龍を突きつけると構えた。

「奇遇ね、貴女も剣だなんて。あたしも剣使いなの」

にっと笑うと蒼剣を抜いた。

しかしこれから勝負と言う時に怖ず怖ずと少年が部屋に入ってきた。

「春姉…誰と戦うの…？」

「秋冬！変なタイミングで入ってこないでよね！」

「戦いに混ぜて…？」

「あんたは足手まといだから来なくていいの…！」

「ガーン！ひ…酷いよ春姉…」

「本当のことでしょう？残念賞」

「うっ…春姉まで残念って言ったあ…」

「うっさい黙れ！勝負が始めらんないじゃない！あんたのせいよ！」

「うわああんまたオレのせいとか酷いよおお……」

「……」

目の前で練り広げられるケンカに雪刃はただただポカンとしていた。

少年のほうは秋冬という名で、どうやら二人は姉弟らしい。

「あの一……」

「もうっ邪魔しないで！」

「はい……」

逆にこっちが遠慮してしまった。あまりにも壮絶なケンカだった為、あたしはこっちそりと部屋を出て天井裏に回ると悠兔を引っ張り上げた。

「この隙に行くわよ、こっち」

雪刃が道案内をして悠兔は天井裏の戸をゆっくり閉めると後を追った。

「本当狭いな…ここは」

「ある意味隠し通路みたいな感じね」

そんな会話をしながら歩くこと約一時間。少しだけ開いた扉が見えた。

「あれは…？」

「しっ…雪刃、颯真の音がする」

扉から覗くと颯真が何やら話していた。

「総督殿、例の夜空雪刃の能力、翡翠悠兔の能力、手に入れました」

「ご苦労だった。聖奈はどうしている？」

「失敗したことが響いているようで部屋から出てきません」

「そうか。颯真、お前に引き続きリーダーを任せる。何かあったら連絡しろ」

「はっ…わかりました」

再び静寂が戻る中、颯真はゆっくりと口を開く。

「もうすぐ…お前たちが動き出せる瞬間^{とき}がくる。」

「そこまでよ、颯真」

「これはこれは姫君。忠犬くんも一緒か」

「お前の作ったその人型は動かさせねえ。」

「それはどうかな。我々bloodylipを嘗めないで貰いたいね」

コソ、と足音が聞こえ振り返ると囲まれているのがわかった。

「じゃあね、吸血鬼の姫君と忠犬くん」

「待て！颯真！」

「…っああああ…や…ける…」

「雪刃！…お前、何をした！」

「別に？あなたたちにはこの場所とともに死んでもらうだけ」

「！！なんだ…壁が…」

「じゃあねー」

気づけば辺りは崩れてきてあちこちが瓦礫の山になっていた。

とにかく出ないと。そう思って俺は雪刃を抱きかかえなんとか全部崩れる前に城を出た。

あれからどれくらい経っただろう。気づくと俺と雪刃は布団に寝かされていた。

使用人たちが入れ替わり立ち替わりで俺と雪刃の世話をしてくれていたらしい。

俺が起きたのに気づいた使用人が声をかけてきた。

「よかった気がついたんですね、悠兎さん」

「…いつのまに城に戻ってきたんだ」

「姫様とともに窓際で倒れていたところを運ばせていただきました。お二方とも顔色が思わしくなかったので、今まで交代制でお世話をさせていただきました」

「…そうか」

ほっ、と安堵の表情を浮かべたあと隣に眠っている雪刃が自分以上

に傷だらけなことに気づいた。

「雪刃は……」

「まだ目を覚ましません。命に別状はないようです。ただ、血を相
当持っていたように安静にしているようです。」

「……わかった、ありがとう。」

「いえ、お気になさらず何かありましたら申しつけ下さい。」

「ああ。」

使用人は失礼しますと言って部屋を出て行った。

使用人が出て行ったあと再び部屋が静かになった。聞こえるのは雪刃の規則正しい寝息だけだ。

「雪刃…ごめんな…颯真を殺せなかった。あいつを殺すことでこの国を守れたかもしれないのに…俺は」

そう言った瞬間、頭になにかが触れた。目線を上にあげると雪刃の手だった。一体いつの間にか起きたのだろうか。

「悠兔、そんなに自分を責めないで。あなたはあたしを助けてくれた。支えてる。颯真を倒す為の能力はちゃんと宿っているはずよ…」

手を握って、ね？と言う雪刃に俺はそれ以上何も言えなかった。今回の颯真を逃がした過ちはそうするしかない故にしまったこと。それを今更悔いても国が救えるという保証はない。

「…悠兔」

「んー？」

雪刃は手を伸ばして俺の頬にそっと触れた。目は潤んでいて今にも泣きそうになっている。口には出さないが、国の姫としての自分を叱責しているのだろう。

「颯真たちのこと、追いかけて？悠兔だけでもなにか掴んできて…」

「…そんなこと出来ねえ。雪刃、俺はお前と一緒にあいつを倒しに行きたいんだよ…そうじゃなきゃ、約束が意味ない」

「…約束…」

「言つたる？二人で倒すつて」

「…そうだったね…悠兔」

雪刃はふわつと微笑むと俺を抱き寄せる。抱きしめようとして彼女が震えていることに気づいた。

雪刃も怖い。俺と雪刃自身の能力を映して（コピー）して手に入れた颯真はその能力を変換し、国を再生させようとしている。颯真たち魔血鬼の一族は元々、国を持っていたものの、魅血鬼の出現によって国を無くしてしまった。結果的に滅びの一途を辿って今に至る。魔血鬼一族は魅血鬼を同等だが異なる存在と捉え、憎んでいても可笑しくはないのだ。

「……能力を解放する」

「雪刃！！」

「いいの、悠兔。颯真に勝つ為だから。…もし、万が一あたしが消えても悠兔にはこの国を継いでもらいたい」

雪刃は愛用の蒼剣にそつと触れると愛しそうに目を細めた。

「お前…それって…何を意味するのかわかってるのか!? 能力を解放したら雪刃は雪刃じゃ居られなくなるかもしれないんだぞ!？」

「わかってる。…もう全部」

「……」

「あたし自身、居なくなる覚悟は出来た。母様と父様が居なくなつてからこの国は荒れた。あちこちで毎日のように国民同士が喧嘩をして居なくなつた父様たちを悔やみ、憎んでた。でもあたしがついでからこの国は変わったの」

確かに雪刃の言う通り、この国は一度荒れた。喧騒が止むことなく続いていた。けれど、彼女がついてからそれは治まり、今に至る。

「…お前がついてから変わったこの国をさらに変えるのか?」

「……そうなつてもいいと思つてる。国を守れるなら」

「…そうか」

俺はそれ以上何も言わなかった。ただ、決意を揺らがせない雪刃を見て国の為に本気だ、と思つた。

「……」

寝返りを打つ音だけが聞こえてあたしは嫌になった。

広い敷地、両親が残した此の城と国。

姫としての生活は充分だし、悠々と暮らしてきたけれど財産が”それ”だけしかないような気がして嫌になる。

「（颯真を倒したら…此の国は救われるの？）」

本当に此の国はそれだけで変えられる…？

国民は…今までみたいについてくる？

そんなことが頭を駆け巡った。

翌日の朝。起きると窓辺に悠兔が座っていた。使用人たちが雪刃が起きてこないって騒いでたぞ、なにしてたんだって話して笑っていた。

あたしは悠兔に話さなきゃと思ったけれどまだ…このままでいたいと言う思いがあったから言わなかった。

もし言ったとしても悠兔のことだからきつと真剣に答えてくれるだろう。けれどそれで関係が崩れるなら話さないほうがいい。そう思った。

「…雪刃が能力を解放するなら俺も一緒に戦う」

「…!?!」

「俺は王子だからと、いつも戦うことを周りに止められてきた。それでも護る為に戦いたくて稽古を付けてもらった。けれど颯真たちに国は壊され、人など誰も居なくなつた。そんなとき、お前に会つたんだ、雪刃。」

「あたし……」

「…初めて会つたとき、少しだけ俺に似てると思った。本能に従いつつも自分を持って自由に生きてる雪刃をただ抱きしめて守ってやりたい。国が決めた結婚でも雪刃とは一緒に居たいって……」

「悠兎……」

「雪刃を護れるなら俺は能力を解放して戦う。今度は国を守れるように」

悠兎は決意を固めていた。あたしよりも先に国のことも、立場も、護る人も、考えていた。あたしは……

「…悠兎、あたし決めたわ。颯真たちを倒す為に居場所を突き止める。悠兎も協力してくれる？」

「…ああ、もちろん」

「よかった…っ!」

ドクン、と胸が鳴ると同時に倒れそうになったあたしを悠兎が咄嗟に抱き留める。

「無理するな。純血を入れたばかりとはいえ、お前の身体はまだ万全じゃない。能力だって今すぐは解放出来ないくらいなんだから…」

「うん…わかってる…」

あたしたち魅血鬼には能力を解放して使える条件がある。体力が万全であるというのがその一つだ。万全じゃない時に能力を解放すると自分自身さえ無くす原因になると一族の間では言われている。きっと能力を最大限発揮出来ないと言うのが原因でそんなことを言われ始めたのだろっけれど、実際あたしや悠兎は半信半疑に思っただけで信じ切っただけじゃないのもまた事実だ。

そして純血が足りていない場合でも能力を解放するのは禁じられているというのもある。今の雪刃の状態が回復するには治癒力の所為でもあと1日くらいはかかるだろう。

「雪刃、寝てる」

「ちよつとっ、なんでよ!?いきなり寝てるだなんて!!」

「お前が今の状態だと足手まといになる。それなら行くのは俺だけでいい。」

「でも…っ」

「いいから!!」

俺はこのとき初めて雪刃に怒鳴ったと思う。今まで一緒にいて怒鳴ると言うことをしなかった。彼女を壊してしまうんじゃないかと怖くて言えなかった自分がいたから。けれど違った。長く月日が流れるにつれ、何を言っても大丈夫だという信頼が出てきたのだ。

「俺はっ…お前に倒れてほしくない!そこまで無理をして国を守られても嬉しくないんだよ!」

「……っ」

「……治療力が高いからお前の身体はすぐ治るだろうが、治っても無茶はするな。それじゃ」

俺はそれだけ言い残すと窓から飛び去った。

悠兎が飛び去ってから、あたしは突っ立ったまま涙を流した。自分を本当に大事にしてくれる人がずっと傍こしに居たんだと思うと胸に染みだした。愛おしくて時折切なくなるけれど悠兎に会ってあたしは変わったと思う。今までにない感情を抱くことも会わなかったらきつとこんな感情は生まれなかつたらさう。

「悠兎…無事に帰ってきて」

そんな言葉が無意識のうちに出て、呟いていた。

颯真の居場所を突き止めるために俺はあちこち回った。けれど、颯真たちは気配すらなく見つけれなかった。

「あら、翡翠悠兔さんじゃない？」

「聖奈…か」

「覚えてくれて嬉しい。でも今日は一人じゃないのよ」

聖奈はガチャ…と銃口を悠兔に突きつけた。

「コレ、妹から借りて来たの。今撃ったら貴方は消し飛ぶわね」

「…なんのつもりだ」

「さあね？殺されるのとあの世を見られるのだけは間違いないわ。そろそろ終わりにしましょうか。さようなら、翡翠悠兔」

パン…と音が鳴ると同時に血が飛び散った。しかし悠兔は銃口を抑えつけていて傷一つなかった。

「そんな物で俺を殺せると思ったのか？」

「ふ…ふふふ…あははは！そうね、貴方がそんな物で死ぬわけがない。けど、言ったでしょ？一人じゃないって」

「!!…おまえらは…?」

「オレは、優羽 - R O 8 x x。我が君の命令で翡翠悠兎、お前を抹殺しにきた」

「抹殺…!?!?」

「そうだ。我が君がオレにそう命じた。そしてもう一人…お前のクローンだ」

優羽がそう言うと同時に靴の音が響いて振り返る。

「初めまして、もう一人の私。私の名前は耀^{あき} - Y 0 . 7 2 5 x x x。主君の命令により、貴方を抹殺に来ました」

「お前が…俺のクローン…」

優羽は流星鐘を構えると突きつけた。

「我が君、颯真を突き止めるのは止める。お前たち魅血鬼一族は大人しく国を守っていれば充分だ」

「……………」

「どうした? 恐怖で言葉も失ったか? …ふん、そうだろうな。吸血鬼の王子と云うのに自国さえ守れず蔑ろにしているとは、所詮地位も御飾りに過ぎんな」

流星鐘をジャラ…と音を立て懐にしまうと聖奈の元へ下がった。

「…お前らは」

「なあに？足掻きなら要らないわ」

「お前らは…あいつの…雪刃の自国心を分かってねエ…あいつは死に物狂いで国を建て直そうと頑張ってた…民たちの争いさえた一人で止めた…それを…お前らは…壊したんだ…目的はなんだ！…国をめちゃくちゃにしてまでそんなにあいつの能力ちからが欲しいのかよ…
っ…！」

悠兎がそう怒鳴ると辺りに強風が吹き荒れ、一瞬にして止んだ。

34 (後書き)

お久しぶりですー
久々に更新してみました。クライマックスまで行くかも？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0713w/>

君へ曖昧なキスを。

2012年1月6日00時48分発行